

# 地域住民と美術家たちが協働、 《海の幸》誕生の文化遺産が復活 青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅



■青木繁「海の幸」記念館として復活した小谷家住宅。庭園にはブロンズレリーフ「刻画・海の幸」が設置されている。

## ■往時が偲ばれる名作の制作現場

今年4月29日、明治を代表する西洋画家・青木繁が滞在した民家として現存する「小谷家住宅」が2年間の修復工事を終え、新たに「青木繁『海の幸』記念館」として一般公開をスタートさせた。

青木繁が友人の坂本繁二郎や恋人の福田たねたちと布良（現館山市富崎地区）を訪れたのは1904（明治37）年の夏。小谷家に40日ほど逗留し、代表作でもある《海の幸》（国の重要文化財）を描いたとされる。

もともと小谷家は、江戸期から続いた富裕な漁家。1944（昭和19）年に廃業するまで船主をしており、布良村の指導的役割を果たしてきた家柄でもあった。

「青木が居た頃の当主・喜録は、若い頃に教員もしていた芸術文化に理解が深い人でした。そのことが小谷家に長く逗留できた理由の一つと推察されています」（NPO法人安房文化遺産フォーラム代表・愛沢伸雄氏）

青木たちが滞在したのは、庭に面した客座敷で二間続きのオクフタマ（約12畳）。漁村の生活文化の中に身を置き、ここで、《海の幸》を完成させ、およそ60点の作品を残した。現在、この部屋には《海の幸》と、神話がモチーフの《わたつみのいるこの宮》の複製画が飾られ、当時は偲びながら作品を堪能することができた。

他の部屋には、《海》や《海景》、布良の海を描いた（絵画）の複製画、青木が友人とやり取りした絵手紙なども展示。また、パリ万博に出品された「日本重要水産動植物之図」（カラー印刷の魚介図）など、小谷家に関する資料も公開されている。

## ■文化遺産を活かして地域を盛り上げる

小谷家住宅は木造平屋建てで、延べ床面積は約100㎡。当時の安房地区に多くみられた分棟型（防火対策のために住居とかまどを分離）が特徴的だ。1889（明治22）年に布良を襲った大火で焼失後、建て替えたとされるが、それから築100年以上を経過し、かなり老朽化が進んでいた。



■青木繁《海の幸》1904年、石橋財団ブリヂストン美術館蔵



■写真奥に見えるのが滞在していたオクフタマ



■1962年、青木繁没後50年に建設された青木繁記念碑



**【青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅】**  
 所在地 館山市布良1256  
 ※安房自然村のバス停周辺に駐車可  
 開館日 毎週土・日曜日  
 (お盆時期・年末年始を除く)  
 開館時間 4~9月 10:00~16:00  
 10~3月 10:00~15:00  
 維持協力金 (入館料)  
 一般200円 小中高100円  
 友の会 年会費2,000円  
 (会員は入館無料)

**【お問い合わせ】**  
 事務局：NPO法人安房文化遺産フォーラム  
 TEL 0470-22-8271  
<http://aoki-shigeru.awa.jp/>

「今後は、この記念館を美術を愛する人々の拠点とする  
 とともに『海の幸』の水産業再生をめざして昔のよう  
 な活気を取り戻していきたい」（同館館長／現小谷家当  
 主・小谷福哲氏）  
 かつて青木らを魅了した大海原の景観、豊かな自然  
 が今も変わらず残る布良の地。歴史伝承のみならず、  
 新たな芸術文化が育まれることで地域の発展につな  
 がっていくことに注目したい。

小谷住宅がある布良は、明治時代マグロ延縄漁発祥  
 の地として繁栄したが、近年では水産業も衰退、過疎  
 化が深刻化していた。こうした中、2004（平成16）  
 年に地域の文化遺産を活かした地域活性化を図るうと  
 の声があがり、青木繁たちが滞在した小谷家住宅に白  
 羽の矢が立った。08（平成20）年には、地元有志によつ  
 て「青木繁『海の幸』誕生の家と記念碑を保存する会」  
 が結成される。翌年には、館山市有形文化財（建造物）  
 の指定が決定。また、画家らが中心となり修復基金を  
 創出する目的で「NPO法人青木繁『海の幸』会」も設立  
 され、館山市、小谷家現当主、保存する会、海の幸会  
 の4者が結集し足並みをそろえて、保存活動を推進す  
 ることとなった。

この間、3・11の影響で難航する局面もあったが、全  
 国巡回のチャリティ美術展の募金や、館山市ふるさと  
 納税を利用した小谷家住宅保存活用支援事業補助金  
 を充てるなど、7年に及ぶ熱心な活動、2年間の修復  
 を経て、無事に開館を迎えることができた。